

頭脳意思と知識活性の細胞意思による意思推論 (人工頭脳の基礎理論Ⅲ)

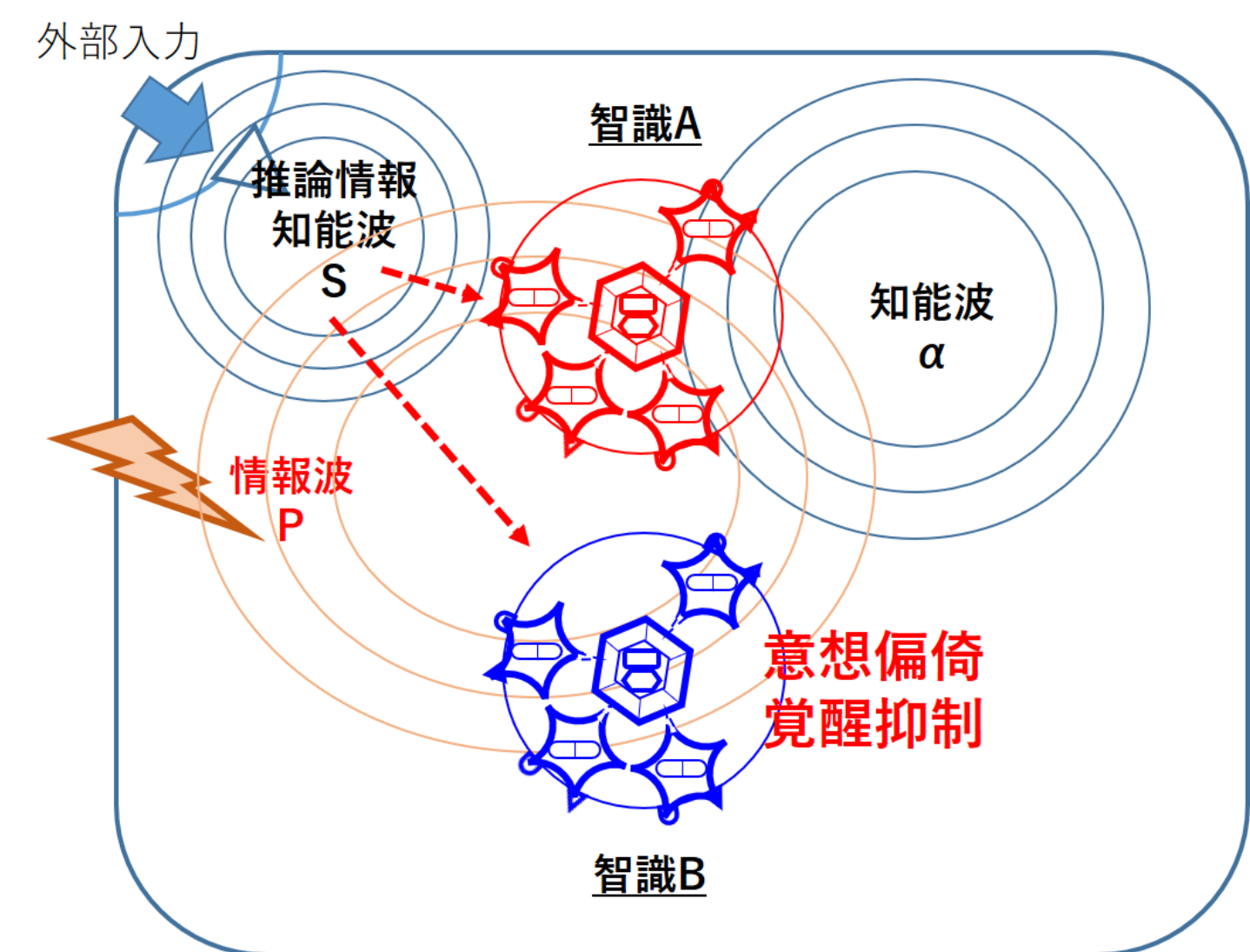
～意思情報の意想偏倚により知識細胞を活性化する意思推論A I～

1. 意思推論の仕組 (意想偏倚による自律覚醒)

意思推論とは、知識細胞が自律覚醒するときに細胞外部の意想(意思)により、智識の覚醒作用や活性化作用に対して意想偏倚させる推論作用である。意思推論の意想(意思)には、頭脳(ベッセル)の外部から与えられる頭脳意思と、知識細胞の活性化頻度によって生成される細胞意思がある。

(1) 頭脳意思による意思推論

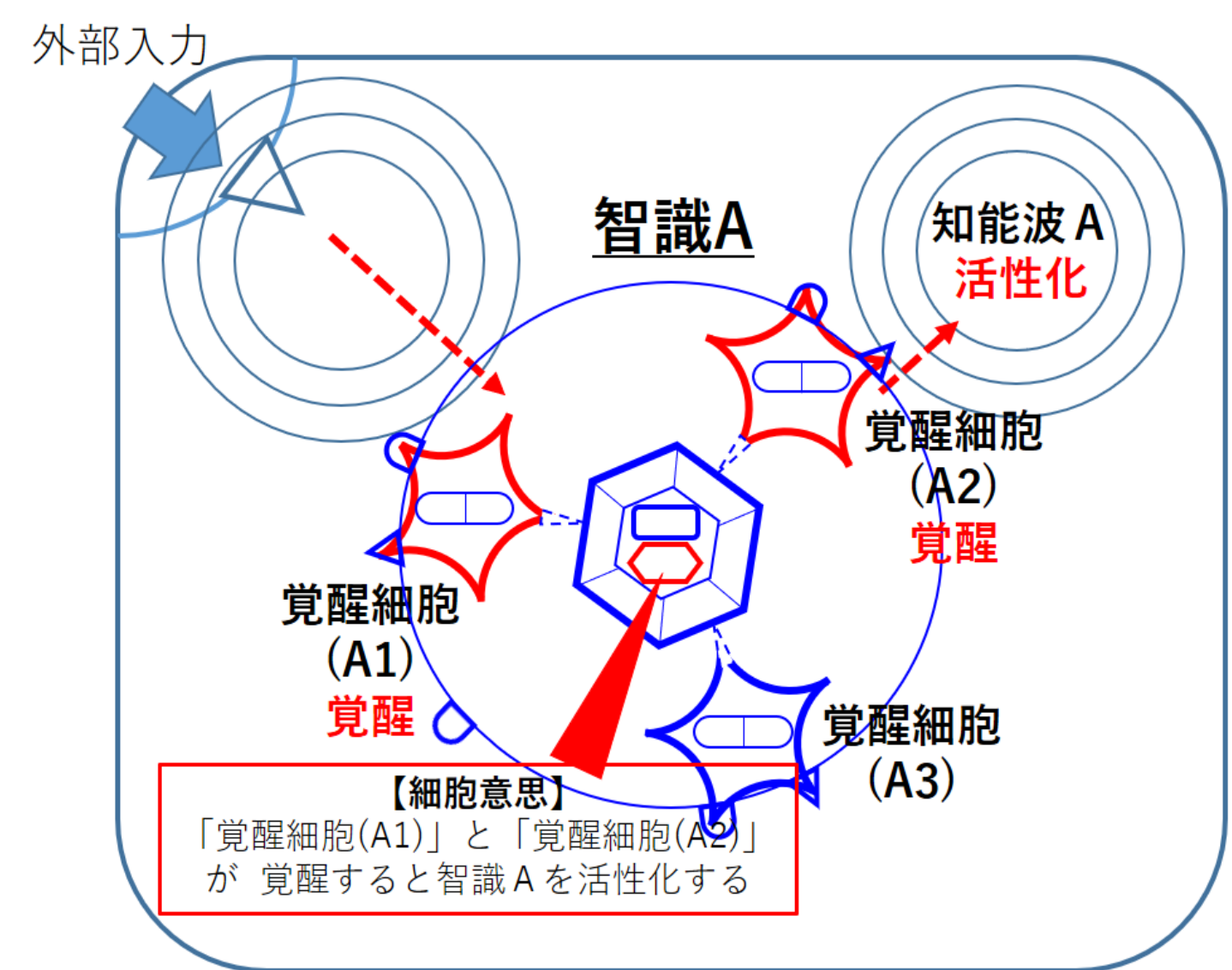
- ①頭脳意思の発信：人工知能の外部より意思(情報波)を頭脳意思としてベッセル内に発信する。
- ②頭脳意思による意想偏倚：智識の中で意思(情報波)が評価されて頭脳意思の意想偏倚が発動される。
- ③智識の推論作用：意想偏倚の結果、智識が活性化される場合と活性化がされない場合がある。



《展示デモにて公開中》

(2) 細胞意思による意思推論

- 智識内部に意思細胞を生成することで細胞意思を発動する。
- ①意思細胞の生成：智識の活性化頻度により智識の内部に意思細胞が生成される。
- ②細胞意思による意想偏倚：意思細胞の覚醒により智識の細胞意思の意想偏倚が発動される。
- ③知識の推論作用：意想偏倚の結果、智識が活性化される場合と活性化がされない場合がある。



2. 細胞意思による自律作用の可能性

(1) 自律意思

自律意思は智識の自律作用を促す細胞意思である。自律意思を持つ知識細胞は意思属性(細胞意思)に関わらず自律的に人工知能を作用できる。自律意思は、人工知能が持つ独立自由度の高い上位の知識構造体(AI感性)の影響により生成する。

(2) 自律作用

自律作用は人工知能が自律的に推論や学習を行う作用で、知識細胞が細胞意思として持つ自律意思により自律作用を行う。自律意思により人工知能が自律的に作用すると、自律型人工知能の実現が可能になる。

《自律意思作用の理論へ引き継がれる》